

暗闇の匂い

牧師 山本 護

礼拝堂の前、灌木の間で、枯葉を押し上げてキノコが現れました。おっ「ホテイシメジ」かもしれない。食べてみようか。でも明日は礼拝だし、やめておこう。ということで、匂いだけ念入りに嗅いでみました。幻想文学的に言えば地底の謎めいた匂い、エコロジーとしては有機物を分解して生態系を循環させている匂いです。



ナナオサカキ(1923～2008)のよく知られた詩。「足に土／手に斧／目に花／耳に鳥／鼻に茸／口にほほえみ／胸に歌／肌に汗／心に風／これで十分」。昔から愛詠していましたが、「鼻に茸」は礼拝堂前に現れたキノコでしみじみ実感。ナナオが広々と語るのも、私は逆に「鼻に茸」から土の中にもぐってみようか。すると駄句ひとつ。「地底にて命まわすや布袋茸」。普段はほとんど意識されない、ミミズやダンゴムシ、菌糸類や微生物の偉大さに目を見張った秋の朝でした。

「もし体全体が目だったら、どこで聞きますか。もし全体が耳だったら、どこでにおいかぎますか。そこで神は、御自分の望みのままに、体に一つ一つの部分を置かれたのです(Iコリント12:17～18)」。体とは教会の比喻ですが、そのまま「環世界(Umwelt)」にも当てはまります。視覚や聴覚のような華やかさはありませんが、嗅覚は土の中で隠れるようにネットワークを張り巡らし、ひょっこり地表に現れるキノコと出会う。この懐かしいような特有の香りは、命が再創造されている匂いです。

メキシコの土俗宗教は、マヤ・アステカの習俗とキリスト教が混じり合っているものが多く、なかでも幻覚キノコを用いるマサテコ族の宗教儀式は興味深い。幻覚を引き起こすキノコは「キリストの血が地に落ち、そこから生えたもの」と信じられ、司祭はそれをひと晩中食べ続けてキリストの託宣を語る。

キノコは暗闇的だ。唐突に現れ、劇的に成長し、急速に消滅する。そして土中にひっそりネットワークを張り、毒性や幻覚性を潜在的に有している。人間の精神は混沌とした地底を必要としており、生命循環も暗闇の菌糸類(キノコ)がなければ成り立ちません。

私たちは「環世界」で生きています。そして見えない暗闇で縦横斜めにつながっている。「神が、御自分の望みのままに、つくられた体」の部分として。ホテイシメジの匂いを嗅ぎすぎて、鼻の粘膜から幻覚物質を吸収したのでしょうか。Ω